



OVERWATCH 2

ヒーローたちの夜明け

破壊と再興

CORINNE DUYVIS, SANGU MANDANNA 著

ストーリー

CORINNE DUYVIS, SANGU MANDANNA

アート

SARA LULL

編集

CHLOE FRABONI

制作

BRIANNE MESSINA, AMBER THIBODEAU

デザイン

JESSICA RODRIGUEZ

ストーリー監修

MADI BUCKINGHAM, IAN LANDA-BEAVERS

ゲームチーム監修

*JEFF CHAMBERLAIN, GAVIN JURGENS-FYHRIE,
PETER C. LEE, MIRANDA MOYER, DION ROGERS*

スペシャルサンクス

IAN LANDA-BEAVERS, MADDIY COOK

日本語翻訳

SHOTARO TSUMAGARI



© 2024 Blizzard Entertainment, Inc.

Blizzard and the Blizzard Entertainment logo are trademarks or registered trademarks of Blizzard Entertainment, Inc. in the U.S. or other countries.



サ ティヤ・ヴァスワニが最後にニラン・ブルクサマニーを目にしてから、11年の歳月が過ぎていた。

11年もの間、サティヤの人生から彼は姿を消していたのだ。

それにもかかわらず彼女は今、彼のもとへと赴いている。自身の思いは飲み込んで、彼に依頼を持ち掛けるよう命じられて。ンジェイから突貫でのレッスンを受け、ヴィシュカー・コーポレーションの法務部が急遽書き上げた書面を携え、作り笑いを満面にたたえ、彼女は旅立った。

サティヤは決して、自分の任務を投げ出さない。だからと言って、今回の任務の成り行きを楽しんでいるかといえば、それも違う。

「ありがとう」

サティヤは別れの挨拶としてパイロットにうなずくと、ヘリジェットからアトランティック・アーコロジーの着陸用プラットフォームへと降り立った。上空から、徐々に近づく施設を感心した思いで眺めていたが、実際に外に出てみると、強烈な潮の香りや髪を撫でつける激しい海風は想像以上だった。

仕事柄、魅力的な場所には多く赴いてきたサティヤだが、こうしてアトランティック・アーコロジーを実際に目にするまでには、かなりの歳月を待たねばならなかった。着陸用プラットフォームからは、幅の広い橋が中央の尖塔へと通じている。超硬質のシーグラス「ドゥロヴィドロ」で作られた尖塔は、陽光を浴びてキラキラと輝いている。気づくと体は無意識のうちに尖塔の方向へと向かっており、彼女は首を伸ばしてニランが今生活し、働いているはずの場所を見渡した。

もちろん、ニランだけではない。世界屈指の学者や芸術家たちがアーコロジーに居を構え、その才能を惜しげもなくコレクティブに提供している。似通った考えの持ち主同士で集まって暮らすというアイデアには、抗いがたい魅力がある。しかも、人類をより良いものにするという共通の目標のもとで協力し合うのだ。いかなる政府とも多国籍企業ともつながりを持たずに。その魅力はサティヤにも理解できた。しかし同時に、彼女の眼には数多くの潜在的な落とし穴も映っていた。信じられないほど魅力的な話には裏があるものだ。サティヤはヴィシュカーでの仕事で痛いほどそれを学んでいた。

少なくとも、目の前に聳え立つ尖塔は彼女の期待していた姿に劣らぬ威容を誇っていた。優美な曲線、外角に沿って滑らかに移動するエレベーター、日中のまばゆい光を反射して七色にきらめくドゥロヴィドロなど、むしろ想像を上回る荘厳さといってもいいくらいだ。

なんと絶妙な均衡の上に成り立っている建物だろう。まさに現代工学の粋を集めた偉業。あらゆる曲線、あらゆる梁にコレクティブの建築家たちの緻密な計算と創造性の発露が見て取れる。それでいて、周囲を泳ぐ魚の群れと変わらないほど自然な海の一部のようにも見えるその姿は、人の手で生み出された人工物というよりは長年の海水の浸食で削り出された自然の芸術のような印象を与えている。

大空へと向かって高く伸びる尖塔はその頂点が雲に届くほどで、基礎の部分は海底深くにまで伸びている。海水は目を見張るほど青く澄み、モルディブの島々を取り囲む海を連想させる。建物も一帯に点在する人工島も、周囲には色とりどりのサンゴ礁と青々とした海藻が育っている。それぞれのプラットフォームを囲うフェンスは設置されておらず、美しい海に向かって拡大していく余地があることを示唆している。だが、訓練を積んだ彼女の眼はパッシブ式のエネルギーバリアによるわずかな空間の歪みを捉えており、プラットフォーム上の人物が海面へと落下しないよう防いでいることが見て取れた。

背後からヘリジェットが再び離陸する音が響き、アーコロジーの偉業に心を奪われていたサティヤの思考は引き戻される。少しの間、彼女は両のこぶしをグッと握り、まるで最悪の時が終わるのを耐えながら待つかのようにその場に立ち尽くした。騒音とともに吹き荒ぶ風が固く結んだ彼女の髪の毛を束ねてはためかせ、顔にたたきつける。衝撃が顔や頭のあちこちに広がっていく。

ヘリジェットが離れると、サティヤはひと呼吸かけて平静を取り戻し、束ねていない部分の髪の毛にさっと手櫛を通した。本当ならば、仕事中はいつもしているように髪を束ねて上げておく方が好みなのだが、とりあえずは見苦しくないように整えて下ろしておくほかない。ボサボサの髪は鏡で見ただけでも嫌いだということに、ましてやビジネスの場では絶対に我慢できない。しかも今回は、ニラン・ブルクサマニー——ヴィシュカー・アーキテック・アカデミー時代にともに生活したルームメイトであり、一時は親友でもあった人物がその相手なのだから。

そこでサティヤは、ニランが遅れているらしいことに気づいた。ここに出迎えに来てくれる手筈だったのだが。

興味深い。

下手をすれば相手を軽視していると取られかねない行動だ。しかしニランの性格を知っている彼女からすれば、おそらく自分の仕事に熱中しているのだろうと察しが付く。学生時代には、彼のことを注意散漫で上の空になっていることが多いと評する声を耳にしたが、サティヤは本当のところを知っていた。その時々で関心を向けている対象が何であれ、彼はその一事に没頭して完全に集中してしまう気質なのだ。議論に没頭している時や遅くまで起きて研究にいそしんでいるときなど、彼女はそんなニランの気質を垣間見ても尊敬の念を抱いてきた。

ニランの姿は立派そのものだった。
だが、心のどこかでサティヤは、正反対の
ことを望んでいた。彼が自身の決断を悔
やみ、不幸そうにでもしていてくれれば、
任務はずっと進めやすかっただろう。

それに、ヴィシュカーのものだとサンジェイが言い張っていたテクノロジーの研究をしている時
も。そのテクノロジーこそが今日サティヤがこの地に降り立った理由だった。

ああ、やっと姿が見えた。

サティヤはさっと両手を脇に下ろす。

通路を大股で歩いて、ニランがヘリジェットのプラットフォームの方へと向かってくる。その身のこ
なしから穏やかな白い髪のうちねりに至るまで、すべてが落ち着いている。強い陽光を受け、日焼けし
た肌は温かみのある輝きを放っていた。彼の装いにサティヤは驚きを隠せなかった。白、ピンク、薄
緑という奇抜な取り合わせに、腰回りに複雑に配された華麗な帯のような黄金のきらめき。

アカデミー時代に身に着けていた制服とは似ても似つかないが、とても優美で遊び心に満ちてい
る。まさに“ニラン”の人柄そのものだ。初めて見るはずなのに、それ以外の服装をしている彼はもう
想像できないとすら思えてくる。

それに比べて、彼女がまとっているパリッとしたヴィシュカーの制服のなんと不釣り合いなことか。

「サティヤ！」

と、記憶とは違う声音でニランが声をかける。

「本当に久しぶりだね、我が友よ。ここで君に会えるとは、うれしい驚きだ」

「ヴィシュカーから連絡があったはずでは？」

「もちろん、“誰かが”来るとは聞いていたよ。でも、それが君だとは知らされていなかった」

「事務的なミスね、きっと」

「ああ、きっとそうだろうね」

そしてしばしの間、2人は互いに見つめあった。まるで、この11年の間に何が変わり、何が変わらな
かったのかを細部まで余さず見て取るかのように。ニランはもう、最後に見た時のような細身の少年
ではなかった。肩幅も広くなり、髪は彼女と変わらないほどに長く伸びている。強さと温かみとの組み

合わせは、彼によく似合っていた。もちろん、身中の隅々にまでみなぎる確かな自信も昔のままだ。

ニランの姿は立派そのものだった。だが、心のどこかでサティヤは、正反対のことを望んでいた。彼が自身の決断を悔やみ、不幸そうにでもしていてくれれば、任務はずっと進めやすかっただろう。

ニランの眼差しは、彼女の髪で止まっていた。きっと、髪の毛の1房がまだおかしな方向に向いているのを見咎めたのだろう。心にズキッと痛みが走る。アカデミー時代には、いつも彼女が“彼の”髪型の崩れを指摘していたというのに。彼はいつも、長いため息とともに髪を手でなでつけ、苦笑いを浮かべたものだ。今の彼女の姿を見て、ニランは何を思うだろう？これだけの歳月を経た今の“彼女自身”を、どう見るのだろうか？

脳裏をよぎったその考えをサティヤはすぐに思考の外へと追いやった。無関係だ。

「変わった乗り物を選択したね」

とうとう口を開いたニランは、今は何も止まっていないヘリパッドを目線で指し示しながらそう言った。

「ここにはずっと高度で効率的な輸送手段があるというのに。もちろん、知っているだろうけど」

「ヴィシュカーの用件は急ぎだったの」

とだけサティヤは答えた。だがそれは、事実の一部でしかなかった。実際には、ヴィシュカーがサティヤに派手な登場シーンを望んだのだ。こうした重要な交渉の場において、ヴィシュカーが代表者を“列車”で一般市民とともに現地に送り込むことなどありえなかった。

「ヘリジェットだなんて、無駄な気がするけれど」

「そうやって非難を続けるつもりかしら、ニラン？」

この返答に、彼は少しだけ動揺したように見えた。もしかしたら、彼の名前の響きがそうさせたのかもしれない。“ニラン”。以前の彼女は、彼のことをいつも“ブア”とニックネームで呼んでいた。

さもなくば、単にあまりに親しげに軽口を叩いたことが原因かもしれない。正式な交渉の場で自らの感情に影響されるだなんて、だらしがない。

サティヤはなんとか、儀礼に適う笑顔を浮かべた。

「単刀直入に訪問の目的を述べさせてもらいます。先ほども言った通り、至急の用件なので」

「その用件が済めば」

と、ニランは言葉を返す。

「先ほどのヘリジェットをもう一度呼び出して帰途に就くおつもりかな？」

「ええ」

通常であれば、ヘリジェットは彼女が用件を済ませるまでこの場で待機する。しかし、昨日のパリでのヌルセクターの襲撃により、世界は緊迫した状況になっている。ヴィシュカーもすべての車両や機体を手元に置いておく必要があったし、そもそもこうした交渉は1日の大半をかけて行われるものだ。

「それならば、今すぐヴィシュカーに連絡を。残念ながら、あなたの訪問はここまでだ」

どうやらニランは、こちらをもてあそぶつもりらしい。まったく。

“あなたも私を置いて去ったじゃない”その言葉を彼女はグッと飲み込んだ。 ——ここに来た目的が、友情を修復することだったら良かったのに。

「ただし？」

と、気圧されるつもりはないことを示しながらサティヤは応じた。

彼の口元が、薄い笑みを作る。

「ただし、帰りは列車を使って陸に戻っていただけなのであれば別です」

そんなこと、ヴィシュカーはきっと気に食わないだろう。正直に言えばサティヤ自身、不満ではある。列車なんて混み合っていて、乗っているだけで気疲れする。騒音こそあれ、ヘリジェットならば少なくともパーソナルスペースは保てる。

それでも、重要なのは任務だ。交渉のテーブルに着くために必要だというのなら、飲むほかない。

「ご自慢の列車の効率性をこの目で確かめられる機会を、うれしく思います」

とサティヤ。

ニランは片方の眉を上げる。

「おや、まだこちらには説得の材料が残っていたのだけれど。プライベートな客室を手配して、その快適性、遮音性、プライバシー性の高さを語って聞かせようと思っていたのに」

おっと。

やはりニランは、彼女のことをよく分かっている。

「寛大ね」

と、すぐに立て直してサティヤは返答する。

「もちろん、感謝してお受けします」

「当然だね」

彼は答えつつ、身振りで先に行くよう促す。

「お先にどうぞ、サティヤ」

サティヤは通路を先へと進み、中央の尖塔の内部に広がる巨大な広場へと足を踏み入れた。かなり混雑しており、彼女にとっては人が多すぎるくらいだったが、素晴らしい人々や構造物、デバイスな

どであふれていて、結果的に不快に思う気持ちより、探求心の方が上回った。

「聞きたいのだけれど」

と、彼女は思わず質問を口にしていた。

「この場所を作るためのテクノロジーや労働力は無償で提供されたというのは本当？外部からの資金提供は一切受けずに？」

「その通り」

ニランは答えつつ、中2階へと続くエスカレーターを彼女に示した。

「それこそ、我々の最も基本的な思想なんだ、サティヤ。コレクティブのメンバーは全員、できる手段で貢献する。そして労働の成果は、全員で共有する」

サティヤはこの答えに、率直に驚いた。

「それって、すべては信頼の上に成り立っているということになるわ。かなりの困難を伴うように思えるけれど」

また、無言の時間があつた。足元のガラスのさらにその下を満足げに泳ぐクジラの一群に目を奪われていたサティヤは、ニランがこちらの顔を奇妙な表情で見つめていることに少し遅れて気がついた。無言はすぐには破られず、気まずい空気が流れる。

ついに口を開いた彼は、「君にとって信頼が容易なものでないことは分かっているよ」と答えた。

無理もないだろう。信頼は、得てして裏切られるのだから。

“あなたも私を置いて去ったじゃない”その言葉を彼女はグツと飲み込んだ。

——ここにきた目的が、友情を修復することだったら良かったのに。

彼女にとって、ニランとの友情があればほどに上手くいったのはいまだに謎なのだ。ハイデラバードのスラム街出身のサティヤと、裕福なチェンマイ家の令息のニラン。物事を組織的かつ正確に捉えて集中するサティヤと、人付き合いがよく反抗的で機転の利くニラン。

正反対の2人だったが、彼らはともにアウトサイダーでもあつた。どちらも才覚にあふれ、ヴィンシュカーの教育を享受し、その教えを独自のやり方で活用した。彼らの友情は、実際上手くいった。多くの共通点があつた彼らは、すぐにアカデミーのあちこちの講義室で抑えた笑いを交し合い、廊下を横に並んで歩く間柄になった。最近の家族旅行について克明に語って聞かせる彼の話に、よく聞き入つたものだ。まだ講義が残っているのに、自分の個人的なプロジェクトに熱中して忘れそうになっている彼を、幾度彼女が注意したことだろう。彼女の踊りの練習に付き合い、1つの動きを完璧に習得できたと納得できるまで何時間も繰り返し練習するところを、幾度彼が見守つただろう。

まるで、大昔のことのようだ。彼らは変わってしまった。お互いに。

しかし、そんなことは彼女が今日ここにきた理由である任務とは関係がない。彼女は中立的な口調を保って応じた。

「昨日のパリにおける、ヌルセクターの襲撃について話したいの。街とその住人たちの生活を立て直す必要がある」

彼女は礼儀正しく感じのいい笑顔を浮かべた。ヴィシュカーでの仕事において、苦労しながら日々挑んでいる笑顔だ。

「我々は、あなたがかつてヴィシュカーで開発したバイオライトのテクノロジーが、大いに役立つはずだと考えているわ」

ニランの視線は、少しも揺らがなかった。

「君の経験から言って、ヴィシュカーは信頼すべき相手に含まれるのかな、サティヤ？」

痛いところを突かれた形だが、それは彼女が意図的に突かせた点だった。少なくとも、彼女は作り笑いを崩さなかった。

彼女のヴィシュカーへの信頼と誇りは、傷つけられたばかりだ。ヴィシュカーにとっての彼女は長らく、信頼できる切り札のような存在だった。才能豊かなアーキテックの専門家であり、会社は彼女に収益性の高いプロジェクトを任せていた。しかしここ数年、サティヤに任される仕事は会社の失態の後始末ばかりになっていた。そうした任務では、往々にして彼らのビジネスの不快な一面を見せつけられた。都市の高級地化やスラム化などのみならず、洪水や飢饉などの大規模な環境破壊もあった。かつては多くの野生動物が暮らし豊かな熱帯雨林の広がっていた土地が、色彩の褪せた荒廃した景色に変わってしまった事例も目にしてきた。そうした彼らの事業の悪影響についての噂を耳にしたニランが、ずっと前に会社との関係を断っていた一方、彼女は彼らのもとに留まり、結果は手段を正当化するはずだと信じ続けてきた。

しかし今ではもう、彼女にも確信が持てなくなっていた。

そしてこの件を自分の中で咀嚼するため、彼女が最後に頼ったのが、ほかならぬニランだったのだ。

「話題の脱線は避けましょう」

と、彼女は冷静に述べた。返答までに長い間が空いてしまった。ニランも、彼女を困惑させたことに気づいているはずだ。彼女は急に制服が息苦しく感じ、グッと引っ張って襟元をくつろげた。

驚くべきことに、彼は笑い声をあげた。

「サティヤ！相変わらず真面目一辺倒だね。ビジネスの本題に入る前に、まずはこの場所を一通り説明しないと失礼だろう？ほら」

ニランは、彼女をバルコニーへと連れ出した。すると、バルコニー全体が壁からすっと切り離され、ゆっくりと尖塔を上昇し始めた。尖塔の内部は、まるで1つの都市のように活気に満ち溢れていた。ニランは、海洋研究用の展望デッキ、住民たちの作品が展示・販売されているギャラリーや美術館、世界各地の料理を楽しむことのできるレストランなどを案内し、最後に住民用の農作物を生産する水耕栽培農園を見せてくれた。彼自身、その1画で希少な種を掛け合わせて育てているのだという。彼が解説してくれるこの場所は、住民たち全員の才能と貢献を最大限生かしていた。彼らはともに手を取り合い、生活の基盤を最先端のテクノロジーで自動化し、クリーンな再生可能エネルギーで動力を賄っている。

クライシス後の貧困から救い出し、完璧に育て上げたご自慢の学生をトロフィーのように見せびらかしたかっただけなのだ。サティヤからしてみれば、与えられた指示をしっかりと守らねばと必死で、CEOのスピーチなど一言も耳に入っただけではなかった。

サティヤは腕を体の後ろで組み、指を肘の辺りに巻き付けるようにして、不意に手を動かしてしまおうことがないようにして歩いていた。今まで彼女は、延々と続く退屈な案内や、傲岸な管理者が救いようもないほど退屈な施設を見せびらかす体験を何度も耐え忍んできた。しかし、今回の案内は、控えめに言っても感心させられる内容だった。彼女が示した関心は、お世辞ではなくまったくの本心によるものだった。

ツアーを終え、バルコニーはドゥロヴィド製製のドアが立ち並ぶ壁の近くで停止した。ニランが手を動かすとドアが一斉にスライドして開き、その内部が明らかになった。艶々と輝く主構造はアーコロジーのほかの部分と大差ないものの、群を抜いて見事な洗練された輪郭線は、見ていると美術鑑賞にも似た喜びを覚えるほどだ。また、同じくミニマルな美しさを備えた家具は、快適性と機能性を両立させている。個人の所有物が開けた場所の簡単に取り出すことのできる棚に整頓されており、そこが居住用の区画であることを物語っている。

「これはいったい？」

と、意図が掴めずに彼女は尋ねた。これほど素晴らしい施設が充実しているアーコロジーの中で、ニランはなぜ居住区を見せようと思ったのだろう。

「あまりにも多くの国々が、オムニックの平等という問題に沈黙を決め込むか、徹底的に反対の立場を示している。アーコロジーへ亡命するオムニックたちは増える一方だ」

「では、これは彼らのための区画？」

「そう。アーコロジーへの貢献の1つだ。専門分野とは少し違うのだけれどね。居住区の計画を進めていたオムニックの集団に手を貸したんだ」

彼は、ドアの立ち並ぶ壁の突き当りにある、広く快適なスペースを指さした。

「このドアの向こうの個人用区画は完成していて、今までにおよそ40人近くのオムニックがここでの生活を選んでいる。ちょっと簡素な印象なのは、作業がまだ完全には終わっていないからだよ。これから空間を分割して、生活用と余暇のための部屋を作る予定だ。エンターテイメント、快適性、そして自己啓発に重点を置く基本設計はアーコロジーのほかの生活スペースと同様だけれど、ここではそれをオムニックの住人に合った専用の形態で実現させるんだ」

サティヤはうなずき、「理に適っているわ」と賛意を表す。

スラヴァーサでゼニヤッタをはじめとしたオムニックたちと過ごした経験は彼女に多くの教訓を与えてくれた。オムニックと人間とでは物事を知覚し認識する方法も異なるかもしれない、というのもその1つだった。オムニックのための空間が用意されている建物でも、彼らに合わせて設計されたものではなかったり、急ごしらえで後から付け足したものであったりする場合が少なくない。この場所のように、最初からオムニックのニーズを念頭に置いて設計された場所というのは貴重だ。オムニックのニーズを考慮する人物がいるということ自体、良くて「珍しい」のが精々なのだ。

もちろん、彼女の抱える自閉症と同じではないことは分かっているものの、サティヤにとってそうした状況は共感できるものだった。ヴィシュカー内で高い地位を得ている今では、生活スペースや個人的な習慣にある程度 of 自由を持つことができているが、アカデミー時代はそうはいかなかった。

学生たちに提供する食事の品質や多様さを、職員たちがいつも誇っていたのを今でも鮮明に覚えている。サティヤにとっては、食事のたびに何が出てくるか分からないというのは恐怖以外の何物でもなかった。電球から発せられる彼女にしか聞こえない高音、ころころ変わり予測のつかないカリキュラム、廊下に飾られた絵画の等間隔でない並び、相手の目を見て答えろと要求する教師たち……。卒業式でアカデミーから表彰を受けて壇上に進み、創設者であるバット博士についてスピーチするヴィシュカーのCEOの横に座らせてもらえた時だって、それはすべて“ヴィシュカーの”ためであり、決して彼女自身のためではなかった。クライシス後の貧困から救い出し、完璧に育て上げたご自慢の学生をトロフィーのように見せびらかしたかっただけなのだ。サティヤからしてみれば、与えられた指示をしっかりと守らねばと必死で、CEOのスピーチなど一言も耳に入っただけではなかった。

“脚は控えめに組んでおくこと、貧乏ゆすりはいらないこと、聴衆の方を見ること、笑顔は絶やさないこと、ライトが当たって聴衆の顔は何も見えないだろうけど見えているように振舞うこと、両手は膝の上に置いておくこと、両手は動かさないこと。子供じみた振る舞いや、気もそぞろな挙動、無礼な態度や、奇抜な行動は控えること。それから……”

続いて行われたサティヤ自身のスピーチは、完璧だった。しかし、それからの1週間は、この地獄のような体験から立ち直るためにベッドの中で丸まって過ごすことを余儀なくされた。盾となって守ってくれるニランすらいなくなっていた当時の彼女は、体調不良だと偽って周囲の人々を遠ざけることを選んだ。ちょうど、かつての彼がやっていたように。

彼は、卒業のずっと前に姿を消していたのだ。

彼女は過去の記憶を振り払おうと努めた。今、この場所で、集中すべき任務があるのだ。

ニランは続けた。

「オムニック志向の建築や設計は、まだ萌芽期にある。人間を中心に築き上げられてきた数千年の知識の集積を一から再構成するのは、一朝一夕でできる仕事ではない。でも、このプロジェクトに携わる機会を与えてもらえたのは、名誉なことだと思う。数々の辛い経験をしてきたオムニックの難民にとって、排斥される心配のない場所を持つということはとても重要なんだ。言い換えるのなら……」

「歓迎される場所？」

と、サティヤが言葉を継ぐ。

「いや、少し違うかな。“歓迎される”という言葉では一時的な来客というニュアンスが出てしまう。この場所は“ホーム”、住み慣れた家であり故郷のように感じられる場所でなければ。後付けで環境を変えてくれたことへの感謝を強いられる場所ではなく、彼らのニーズを最優先する場所だ」

ニランはそう言って、広間を見渡した。見るからに不完全な作業途中の様相を呈しているが、彼にとっては気にならないらしい。サティヤはむしろ、彼の目に誇りが満ち満ちているように感じた。

サティヤにとって、他人の感情を読み取ることは決して得意分野ではない。しかし、「誇り」だけは、今ではよく理解できていた。

しかし、ニランの目に宿る誇りは、サンジェイをはじめとしたヴィシュカーの上層部のそれとは異なるもののように見えた。自分自身への誇り、すなわち自惚れや高慢、気位のようなものではなく、自身の成果への誇り。自らが成し遂げた貢献への誇りだ。

「硬質光の構造をもっと効率的にできる。改善の余地があるわ」

検討を加えてから、サティヤはコメントした。

「そうかもしれないね」

と、ニランは認めた。

「君の専門知識はとても有難いよ。手を貸してくれるというのならね」

サティヤの頭の中では、すでに多くの可能性が検討され始めていた。とはいえ、アーコロジーに口出しをするような立場に彼女はいない。サティヤは話題を転じた。

「次へ進みましょう」

「もちろんだとも」

バルコニーが浮上し、陽気な雰囲気がかすむ農園を通過する。教師たちに見守られながら、子供たちが熱心に働き、クスクスと笑い合っている。サティヤは、年齢を問わず誰かがあれほど楽しそうにしているのを最後に見たのはいつだろう、と自分に問いかけた。ここ数年の記憶にはそういった思い出はないことを悟り、暗澹たる思いがした。そこで、さらに記憶を遡り、アカデミーで過ごした子供時代を思い起こしてみた。問題はいくつもあったが、それでも楽しい思い出もいろいろとあった。少なからず楽しんでいた。大抵は、今隣にいる人物と一緒に。

「誰もが満足しているように見える」

追憶を振り払おうと必死な彼女は、素朴な感想を述べた。

「この場所の人たちは、目的を持って行動しているけれど、時間に追われてはいない。時々手を止めて、言葉を交わしている。とてもリラックスしているように見えるわ」

「避難場所を求めてアーコロジーに来る人は増え続けている」

と、ニランは事実を再確認する。

「ここでは何も恐れるものはない。本来の自分を偽る必要もない」

それは、どれほど素晴らしいことだろう。

彼女は返事をしなかった。蘇ってくる苦い記憶を意識の外に追い出すことで手一杯だったのだ。

ニランが彼女のもとへと歩を進める。

「サティヤ？先ほどから、どこか苦しそうに見える。気になる点があるのであれば、どうか話してほしい」

彼女にそんなことができるわけではない。ここにいる目的は、そんなことではないのだから。

自分では平然としていたつもりだったが、思っていた以上に顔に出ていたのかもしれない。それとも、これだけの歳月を経てもなお、ニランは彼女のことを深く理解しているということなのだろうか。どうやら、自分の言葉が彼女に及ぼした影響にも気づいたようだ。

「ヴィシュカーが、君に意に染まぬことを強いているのなら……」

彼は少しだけ言い淀んで続けた。「君は、彼らに何の義理もない。何ひとつ負うところはないのだから、彼らのもとに留まる必要なんてない。これだけは忘れないで、どれだけ時間が経っても関係ない。助けが必要なら、いつでも手を貸す」

かつて大事な大事な、唯一無二の親友とっていい間柄だった相手からの言葉に、彼女の中で何かにヒビが入った。

「なぜ？」

困惑し、ニランが眉をしかめる。

「なぜ去ったの？」

と、積年の心痛もそのままにサティヤは問う。

「私たちは友人だったはず。アカデミーで一緒に育った仲でしょう？あなたのことを、誰よりも信頼していたのに。会社からはあなたに連絡することを禁じられ、留まるほかなかったことも知っていたはず！どうしてあなたは、ヴィシュカーのテクノロジーを持って逃げたの？」

「ヴィシュカーのものじゃない。自分で生み出した」

「“彼らが提供した”教育の元、“彼らが提供した”リソースを使ってね。独占権は彼らのものになると、わかっていたはず」

この指摘は、ヴィシュカーの言い分だ。アーコロジーに来る前に覚えさせられた、彼らの法的立場の1つでしかない。

彼らの側。彼らの一員。 それが本当に彼女の現状か？ ニランにずっとそう説き聞かせてはいる が、サティヤ自身、 確信を持たずにいる。

「ヴィシュカーのおかげで多くを学べたし、そのことは感謝している。でも、いつまでもそこに留ま
ってはられない。だから、前に進んだんだ。彼らの所有物になるつもりはない。自分の心も、テクノ
ロジーもね」

「自分自身に利益が入るようにしたかっただけよ」

今回の会談で初めて、ニランが心から驚いたような顔を見せた。

「“利益”だって？彼らがそう言ったのかい？」

そして片腕を薙ぎ払うように振り、この場所とアーコロジーを表現しながら続ける。

「コレクティブの仕組みは知っているだろう、サティヤ。ここでの成果は、何ひとつとして“利益”に
なんてつながっていなかったはずだ。ヴィシュカーにおいても、同じことが言えるかい？」

サティヤ自身、先ほどの言葉を言い終える前にもう誤りに気づいていた。つまり、ニランの離
反についてサンジェイが語ったことを、サティヤは心の底から信じてはいなかったのだ。信じるこ
とができれば、もっと楽だっただろう。

彼女がここを訪れたのは、彼らの言葉が理由ではない。

「ヴィシュカーは人助けをしている。あなたが彼らのもに残っていれば、もっと多くの人を助け
られたはず。彼らが提供できるリソースは……」

「彼らが人助けもしていることは否定しない。だが、利益と影響力を拡大させるために、壊滅的な
ダメージを及ぼしていることも忘れてはいけない」

「ここには、あなたの助けを乞うために来たの。私への批判は結構よ」

「いいや、君への批判じゃない、サティヤ。“彼らへの”批判だ」

「私だって、彼らの“一員”よ！」

ニランは腕を組み、毅然としつつも優しい眼差しを向ける。

「それを真に受けられるほど、君との関係は浅くないよ」

サティヤは自分が感情的になっていることに怒りを覚え、後ずさった。ここまで、上手くこなしていたのに。本当の想いは自身の中に秘め、成すべき任務に集中し、サンジェイから命じられた通りに行動していた。

ヴィシュカーの完璧な従業員というイメージを維持するには、いつも何らかの犠牲を払うことが必要だった。しかし、こうしてニランと面と向かって話していると、その苦勞は何倍にも増すように思えた。

彼女が望んでいたのは、彼を説得することでも、自分を擁護することでも、議論することでも、取り繕うことでもなかった。

彼女はただ、かつてのような関係に戻りたかっただけなのだ。

「最後に会ったのはもうずっと前よ、ニラン」

と応じるサティヤの声はしかし、平板で疲れ切っているように聞こえた。

「人は変わるの」

「もちろん、変わるも。それでも、君が完全にヴィシュカーの側についているなんてこと、信じないよ」

彼らの側。彼らの一員。それが本当に彼女の現状か？ニランにずっとそう説き聞かせてはいるが、サティヤ自身、確信を持たずにいる。

いつか、彼女は決断を迫られる。ヴィシュカーで働いてきた中で目にした悪行と、彼らが成してきた善行を天秤にかけなければいけない日が来る。より大きな善のための犠牲という概念を彼女は信じているし、もちろんれには“どこかで”線引きが必要だということも分かっている。それでも……。

サティヤにはまだ、その線引きを行う心構えがなかった。

一方のニランは、とっくの昔に線引きをしてしまったようだ。彼女には、ニランが言外に込めた意図を読み取ることはできなかったが、そうするまでもなく彼の考えは明白だった。

「ヴィシュカーに戻る気はない、ということね？」

「ない」

と、単純明快な答えが返ってくる。

サティヤは、顔を引きつらせながら片笑んだ。

「これだけの時間を社交辞令と雑談に費やしておいて、こちらの願いを聞き入れるつもりは毛頭なかったというわけね」

彼女は突然、強い徒勞感に襲われた。もう続けたくない。でも、続けなければ。今回の任務は、サティヤとニランだけの問題ではない。ヴィシュカーとコレクティブとの問題ですらないのだ。

「私がここに来たのは、人々のため。弱い立場の人よ、人間もオムニックも含めて。あなたの仕事で、彼らを大いに助けることができる」

「それは理解できる」

と短く答え、ニランは続ける。

「本当だ、きちんと理解している。だけれど、今テクノロジーをヴィシュカーに明け渡して必要とする人たちのもとに本当に届くのかい？所有権法とライセンス料に守られて、嚴重にしまい込まれるだけでは？ヴィシュカーの連中は富める者たちの求めにだけ応じて、ほかの人は見捨てるんだ。サティヤ、君も分かっているはず。このテクノロジーだって、彼らは同じように扱うに決まっている」

彼は首を振り、自分の意見を改めて主張する。助けを必要とする人には、可能な限りの支援をする。パリだろうがどこだろうが、それは変わらない。でも、それは自分のやり方で、だ。彼らのやり方ではなく」

「それならなぜ、私がここに来てすぐにそう言わなかったの？」

「言おうとしたさ。ヴィシュカーが送り込んできたのが別の誰かなら、言っていたはず」

ニランの顔に、弁明の色は浮かんでいない。

「連中の使者なんて、すぐに追い返してやるつもりだった。でも、君の姿が見えて……。本当に“久しぶり”だ、サティヤ。この11年、君とは一言も交わすことなく過ごしてきた。そう……。一番の親友である君と。それなのに、ただ追い返すなんてできるわけがないだろう？ホームになったこの場所を、君に見せたかったんだ」

「時間を無駄にしたわ」

「君がそう感じるのなら、ね」

と言いながら、ニランは首をかしげる。その顔には、かつての少年の面影がまだ残っている。

「本当にそう感じる？」

サティヤはその質問に、うなづくことができなかった。うなずけば、それは嘘になる。

動き続けていたバルコニーが、静かに停止する。流線型のデザインの、混雑した輸送ハブに入ったのだ。

「列車まで案内してくれるのでしょうか？」

「もちろん。これ以上、君の時間を無駄にしたいくはない」

彼の声に傷ついた響きを感じたように思い、ハッとして彼の顔を見たが、表情にはそんな気配は微塵も現れていなかった。

次にサティヤがどんな言葉を発するつもりだったのか、彼女自身もう知る由もない。予期せぬ音で、会話は中断させられたからだ。

それは、叫び声だった。

彼女は声のした方を確かめようと、辺りを見渡した。駅の向こう側で、乗客たちが大挙して列車から駆け出してきている。ロンドンから到着したばかりの列車だ。プラットフォーム上で、躓いて倒れこむ者もいる。

「これは……？」

と、ニランが目を大きく見開く。

乗客たちは口々に叫び声をあげながら、逃げるように列車から飛び出してくる。混乱と混沌がハブ

サティヤの本来の特技は、踊りだった。 戦いの才能は、持って生まれたものではない。 だからと言って、戦いに長けてい ないかといえばそれも違う。

を支配していた。

「いったい何が？」

と口にしつつも、サティヤは答えを待たずに列車へと駆けていった。何が起きたにせよ、1つだけはつきりしている。人々は、助けを必要としている。

彼女にできることを、何でもやるだけだ。

ガントレットを展開すると、列車から転がり出てきた人たちを硬質光のシールドで助け、その背後から降り注ぐエネルギー弾の雨からも守る。乗客の数名は、かなり重傷のようだ。

「あの人たちを連れ出して」

とニランに向かって叫ぶが、騒音でその声はかき消されてしまう。振り向いて彼の反応を確かめようとすると、そこに彼の姿はなかった。

助けを呼びに行ったのだろう、おそらく。それは今、関係ない。目の前のことに集中しなければ。

列車までたどり着くと、新たな影が近くの乗車口に姿を現した。光沢を放つ金属、鋭利な角。サティヤは一瞬、オムニックの乗客かと思った。だが、違う。あまりにも落ち着き払っている。その眼には何の光も宿っていない。魂のない、抜け殻だ。そして、その腕は……手首に向かって細くなっていく代わりに、流線型のエネルギー武器に向かって太くなっていた。つい先日、ニュース映像で目にしたような武器だ。

その影は、乗客などではなかった。乗客たちが逃げ惑っていた“相手”だ。

「ヌルセクター」という言葉が、サティヤの口からこぼれた。疑いの余地はない。昨日のパリでの襲撃は、さらなる混沌の序章でしかなかったのだ。まさに、サンジェイの懸念していた通り。

鋭いアラーム音が、悲鳴の合間に鳴り響く。

「アーコロジーは襲撃を受けています」

構内のあちこちに設置されたスピーカーから音声が流れる。

「すべての住民と訪問者は、緊急時行動計画Aに従って各自の居住区画に避難してください。セキュリティ担当者は、輸送ハブに向かってください」

ヌルセクターのユニットが列車から姿を現し、近くにいた2人の乗客が即座に吹き飛ばされる。

後方の車両からはさらにユニットが出てきており、進路上にいる者を誰彼構わず斬りつけている。サティヤがさらにシールドを張り、すんでのところまで年配の2人組を助け、怪我をしたオムニックにも這って逃げる余裕を稼ぐことができた。乗客たちは列車のドアから広がるようにして必死に逃げようとしており、怪我を負った人たちとその救助をしようとする者たちだけが取り残されている。

そこに、ニランもいた。

垣間見えた白い髪とバイオライトの光で、すぐに状況が飲み込めた。ニランは助けを呼びに行ったのではなく、“自ら助けに”行ったのだ。

そのことに気づいた瞬間、サティヤの全身に衝撃が走った。ヴィシュカーの同僚とは違う、あれは“ニラン”なのだ。救助するように声をかけた時には、とっくに怪我人たちを助けに行っていたのだろう。

意識のない大人に覆いかぶさり、顔を真っ赤にしながらか涙を流している2人の子供を中心に、巨大な葉が広がる。いや、葉ではない、花びらだ。それも、蓮の花の。バイオライトの花が優しいピンクの光を放ちながら、一家を包み込んで安全な場所へと運んでいる。

一瞬、ニランの能力にサティヤは見惚れてしまった。以前にも彼のバイオライトを目にしたことはあったが、当時の彼らはまだ子供だった。形が定まらず、光も暗いうえに安定せず消えがちで、将来の可能性を垣間見せる芽のようなものでしかなかった。葉のように見えなくもない形、瞬きながら今にも消えそうな枝。

今見ている“花びら”は、それとはまったくの別物だった。今のニランは青年であり、力も最盛期にあるのだ。

まさに圧巻の光景だった。

サティヤは、意識をロボットの方へと戻した。ニランが守ってくれているなら、自分は攻撃に転じることができる。

サティヤの本来の特技は、踊りだった。戦いの才能は、持って生まれたものではない。だからと言って、戦いに長けていないかといえばそれも違う。幼い頃は無力なままに怯えて過ごしていた彼女も、大人になるとヴィシュカーの格闘訓練を受けて一変した。無限の可能性を秘めた硬質光を自由に使いこなせる彼女にとって、戦闘技能の習得はアーキテックの研究とは比べ物にならないくらい容易なことだった。

破壊というのは、常に創造より簡単なものなのだ。

氷の如き冷徹さで、サティヤは正面のロボットに向き直り、ガントレットでフォトン・プロジェクターを実体化させる。

「あなたは招かれざる客よ」

敵ユニットは彼女には目もくれず、その横を通り過ぎようとする。金属特有の光沢を放つ敵の体に、背後にいるオムニックの姿が反射して見えた。恐怖で動けなくなり、柱にもたれかかっている。

即座にフォトン・プロジェクターを放ち、ヌルセクターのユニットの胴体に風穴を開ける。

遠くからこちらを見据えている ニランの目を見返してもみたが、彼のもとへ 説明しに行っているのは時間がかかりすぎる。 すぐに行動しなければ。

「逃げなさい」

サティヤが声をかけると、背後のオムニックは出口へ向かって這い進んでいった。

ユニットの排除は、予想していたよりも容易だった。ニランと2人だけでも、何とかなるかもしれない。

列車が軌道上で軋み音を立て、サティヤは音のした方に目をやった。車両が横転し、駅構内へと押し込まれていた。車体はへこみ、窓ガラスは粉々になっている。車内のあちこちには敵ユニットが雲霞の如く張り付いており、客車を目指して障害物を排除しようとする者もいれば、車体から飛び出して構内を逃げ惑う群衆へと向かう者もいた。

そこからの数分間は、フォトンやレーザーが炸裂する中で電子機器の焼けるにおいが漂い、血と恐怖があふれる中で叫び声が飛び交う凄惨な時間となった。サティヤはそれらすべてを意識から締め出し、次の標的とその標的をいかに効率的に排除するかだけに神経を集中させた。

金属が軋むこの世のものとは思えない音が響き、サティヤの集中が途切れる。ハッとして振り向くと、新たに構内に入ってきたばかりの車両の1つが、内側に潜む巨大な何かに押し広げられたかのように歪んでいた。車体の一部は、圧力に耐えきれずズタズタに引き裂かれてしまっている。それ以外の部分は、今やプラットフォームのあちこちに散開している敵勢力の攻撃によって直線状に断裂している。

車両の屋根がゆるみ、吹き飛ばされて壁に激突する。列車から出ようともがいていたサイのようなユニットが、ついに身をかがめる必要がなくなり、サティヤが乗ってきたヘリジェットにも劣らぬ巨体をさらけ出す。

片足を動かすだけで、巨躯の重みに耐えかねた列車の壁がアルミ箔のようにひしゃげる。

「サティヤ！隠れるんだ！」

と、ニランの声が構内の彼方から響く。彼は両手を伸ばし、バイオライトのツタで逃げ惑うオムニックを助けていた。

ニランや避難中の群衆のいるプラットフォームに向けて突進する機械仕掛けの獣の背中を、サティヤは睨み付ける。アーコロジーの治安部隊が武器を斉射するが、外殻には傷ひとつつかない。機械の

サイは、脇目も降らずに突進を続ける……。あの巨体のどこかには、付け入るべき弱点があるはずだ。

いや、あのサイズに匹敵する何かが必要なかもしれない。急いで行動しなければ。まだ、奴の周囲ががら空きになっている今のうちに。彼女は腕を素早く振り、敵の攻撃をさっと横に避ける。その瞬間、まるでペンを持って空中にサインでもしているかのようにその指が精密な動きを見せる……。

敵ユニットの頭上1メートルほどのところに、テレポーターが現れて展開する。金属の支柱が石の天井に食い込み、ポータルが大きく口を開ける。冷たく青い光を放つその直径は、少なくとも3メートル以上ある。

サティヤはもう一方のテレポーターをすぐ横の列車の軌道上、戦闘ロボットたちが運ばれてきた最初の列車のボロボロになった1号車の直下に展開する。

車両が音を立てて傾き、先頭部分からポータルへと吸い込まれていく。巨大な敵ユニットの頭上に開いたポータルから、車両の底部が垣間見える。

一瞬、車両はそこで停止し、ポータルを通過しないかのように見え……。

次の瞬間には、甲高い金属音とともに再び動き始めた。狙い通りだ。ポータルが閉じる寸前、車両が落下してサイのユニットの頭上に降り注ぐ。駅構内に、轟音が鳴り響いた。金具が弾け飛び、金属が濡れた段ボール紙のようにひしゃげる。敵ユニットはその巨体を地面に叩きつけられ、石造りのプラットフォームでばらばらになる。

相当のダメージではあったものの、まだ倒し切れていない可能性を考慮し、サティヤはフォトン・プロジェクトターのモードを切り替え、金属製の頭部……というよりは、ぐちゃぐちゃになってほとんど車両と一体化してしまっているその残骸に狙いをつける。アーコロジーの治安部隊が、ユニットのもとへと殺到する。その動きからは、彼らの練度の高さが窺えた。幾層にも重ねられたアーマーの隙間を狙って正確な射撃を行う者と、その隙間に素早く爆発物を設置して即座に距離を取る者が、巧みに連携している。

巨体がピクリ、ピクリと2度痙攣するように動いたが、起き上がることはなかった。

サティヤが冷静に状況を分析する。まだ自分の息は上がっている。民間人の大半は駅からの退避を終えている。治安部隊が、ヌルセクターの残りのユニットを追討している。ニランは負傷者たちのそばで膝をつき、傷に両手をかざしているが、視線はしっかりとサティヤを捉えている。

周辺には、動かなくなった遺体が横たわっている。人間もいたが、多くはオムニックだ。

何かがおかしい。倒れているオムニックたちの大半が、大した外傷を負っていない。さらに奇妙なことに、彼らの頭部には角のようなものがついたデバイスが取り付けられ、顔を覆っている。

あれはいったい……？

また、サティヤはほかの異変にも気がついた。倒れている遺体の大半が被害者たちで、襲撃者の数が少なすぎるのだ。

サティヤは周囲を見渡し、遺体から遺体へと視線を走らせる。輸送ハブのあちこちに散乱している

戦闘ロボットの数は、合計で30にも満たない。列車でここに現れた数より、はるかに少ない。

「どこ……？」

と、呟きがこぼれる。

だが、彼女はすでに知っていた。

最初に戦ったユニットは、サティヤよりも彼女の後ろにいたオムニックを優先させていた。それに加えて、倒れたオムニックたちの頭に張り付いているデバイス。それらを考え合わせれば、ヌルセクターの狙いが何であれ、オムニックが関係していることは明白だ。

そして、アーコロジーにいるオムニックの大部分は、この上層の輸送ハブにはいない。避難放送で呼びかけられた通り、下層にある各自の居住区画に身を隠しているはずだ。

真っ先に浮かんだ考えは、治安部隊の隊員たちに指示を飛ばすことだったが、周囲はまだ喧騒が止まず、混乱が続いている。

遠くからこちらを見据えているニランの目を見返してもみたが、彼のもとへ説明しに行っている時間は時間がかかりすぎる。すぐに行動しなければ。

今は、こちらの行動を見たニランが事態を理解してくれることを祈るほかない。

サティヤは来た道を走って戻った。近道を見つけた場合以外は、先ほどニランと一緒に通ったばかりのルートそのままだ。途中、壁の出っ張りへと滑り降りて避難者の一団を回避したり、テレポーターを使うことで広大なエントランスホールをショートカットしたりすることができた。

ここでも、治安部隊がヌルセクターのユニットと戦闘を繰り広げ、あちこちに遺体が横たわっている。その大半がオムニックで、先ほどのものと同じ奇妙なデバイスを頭につけられている。サティヤは、口を閉じたまま歯の間から息を漏らす。手を貸したいのはやまやまだが、この先にはもっと多くの敵がいることを知っている。

駅構内の混乱、巨大なサイのようなユニット……。そのすべてが、本当の目的に気づかせないための陽動だった。なぜ、もっと早くに見抜けなかったのだろうか？

サティヤは走りながらガントレットを軽く叩き、ニランが見せてくれたオムニックの居住区画にホールから直接移動できるよう新たなテレポーターを設置した。血中を駆け巡るアドレナリンに突き動かされた彼女は躊躇いなくポータルを抜けるが、頭の片隅では徐々に体の疲労が強まっていることを感じていた。彼女のテレポーターは芸術作品であり、本来は急ごしらえでいくつも生み出すものではない。焦燥に駆られながら連続で作ったことで、サティヤはかなり困憊してしまっていた。

世界が流れていく。瞬きの間に体はテレポーターを抜け、サティヤは膝を曲げることで着地の衝撃を緩和する。

少なくとも十数体の戦闘ロボットが、2メートルほど前方のドゥロヴィド口製のドアに集中砲火を浴びせている。速射された弾丸がガラスにぶつかり、衝撃で激しく揺れる。ドア自体は持ちこたえているようだが、戸口のある壁の方には大きなヒビ割れが生じてしまっている。

ヌルセクターはまだ内部に侵入するには至っておらず、その先の大勢のオムニックが避難する個別

の居住空間も無事のようにだ。

サティヤが来たからには、これ以上敵が歩を進めることは許さない。彼女は前方に両の腕を突き出し、親指と人差し指とで空間を広げるような動作をする。青く輝くフォトン・バリアが展開され、傷ついた壁を敵の攻撃から守ってくれる。

サティヤは深く息を吸い込み、そのあとの展開に備えた。周囲のユニットが総がかりで攻撃してくるなか、彼女が一瞬でも気を抜けばものの数秒でバリアを突破されてしまうはずだ。

もっと簡単にこの状況に対処する方法も、彼女にはあった。ロボットたち自身はそれほど頑丈ではないので、彼らを直接攻撃していれば、オムニックに被害が出る前に敵を全滅させることもできたかもしれないのだ。しかしそれは、バリアの展開を諦めることを意味し、そうなれば攻撃の被害は……。

いや、そんなリスクは冒せない。もう少しの間、何としてでも耐えきってみせるだけだ。

彼女は新たに生じたものも含めて、壁のヒビ割れを補修した。特に脆弱な個所を補強し、あちこちに生じた隙間を埋め、バリアをスキャンして強化の必要な脆い部分がないか確かめる。

敵ユニットの一部は、知恵を働かせて攻撃をサティヤ本人に向け始めた。彼女も間一髪のところ自身で自身の周囲に簡易シールドを展開し、攻撃を受け止める。攻撃の大部分はそれで防ぐことができたものの、すべてを受け止め切るには強度が足りなかった。1発が、彼女の脚の側面に焼けつくような痛みを残していった。

だが、ここで膝をつくわけにはいかない。壁に全神経を集中させなければ。あと数秒さえ耐えきることができれば……。

「サティヤ！」

来てくれた。

ニランの声が——いや、ブアの、“ブアの声”が——心地好い調べとなって耳朵を打つ。バイオライトの蓮をエレベーターのように使い、ブアがこちらに下りてくる。

「遅かったじゃない」

と、彼女が強張った声をかける。

ブアが床へと降り立つと、彼の背後で蓮が消滅する。

「遅れて来るのはよく知っているはず。そんなことで驚かないだろう？」

いまだバリアの維持に集中し、脚の痛みにも耐えていた彼女だが、その顔に微かな笑みが浮かぶ。

おしゃべりの時間はここまでだ。

ブアはクルリと1回転して前進し、ガントレットを装着した右手からバイオライトの針を次々と発射する。ブアは針——ほとんどトゲと言っていいサイズだ——を標的にぶつけながら歩み寄り、サティヤのすぐ横で足を止める。金属が引き裂かれ、火花が飛び散る。

敵ユニットの狙いが、サティヤのバリアからブアとサティヤたち自身へと移る。シールドの展開をやめたりはしなかったものの、彼女は集中を少し緩めてシールドに割いていた意識の一部をマルチタスクの実行に割り当てる。一瞬のうちに、近くにいた2体のユニットの背後にテレポーターが生成さ

**精密さ、気配り、温かみ。
多くの人々が汗を流し、愛情を込めて
築き上げてきたことが見て取れる。
家と呼べる場所を失った人、
そんな場所をそもそも持ち得なかつ
た人のための、新たなるホーム。
ブアが誇りに思うのも当然だ。**

れる。彼女の意図を即座に理解したブアが、戦闘ロボットに向かってトゲを放ってポータル内へと押し込む。尖塔の外側十数メートルのところ、ポータルから転がり出てきたユニットたちが海へとなす術もなく落下する。

だが、この技は1度しか使えそうもない。ここに来るまでに複数のテレポーターを使ったり、輸送ハブで巨大なポータルを生成したりしたため、もうサティヤのガントレットにはエネルギーがあまり残っていないのだ。

サティヤがセントリー・タレットを数個天井に設置すると、ブアの背後から迫っていたユニットにダメージが加わる。右側からの攻撃を回避し、回転しながらフォトン・プロジェクターを取り出す。ブアのトゲが彼女の背後で音を立てて飛び出し、その風で髪が少しなびいたものの、彼女自身にはかすりすらしなかった。サティヤは空中でぐるりと方向を変え、踊りと戦闘を織り交ぜた、優美さと荒々しさが交ぜとなった舞を見せる。下からさらにやってくるドローンの姿にもまったく臆するところがない。

時折、敵ユニットの一部が何とかオムニックのもとへたどり着こうとして、思い出したようにサティヤのシールドへの攻撃を再開する。だが、そのたびに彼女は攻撃を中断して壁の維持へと全神経を集中させ、即座にブアが進み出て彼女の背後を守るということが繰り返された。

最後のユニットが床へとくずおれ、火花を上げる金属の塊に姿を変えて初めて、サティヤはシールドを解除した。あれほど堅牢だったシールドが、一瞬で無に帰す。まるで、石鹸の泡が音もなく弾けるかのようだ。

サティヤの膝から力が抜けて危うく倒れそうになるが、手近な壁にもたれかかって何とか立ったま

まの姿勢を保った。数階上のメインホールにふと目をやると、戦闘によって発生した土埃がまだ漂っているものの、武器を撃ち合うことで発生する光は確認できなかった。もう、ヌルセクターの新手が迫ってくる心配はなさそうだ。

「サティヤ、血が出ているじゃないか」

ブアが心配した表情で彼女のもとへと近づく。

「ちょっと診てみよう」

「大したことないわ」

と彼女は答えたが、ほんの少し前に進もうとしただけで脚が痛み、それは事実ではないと抗議してくる。

「ふう。どうやら、“大したことある”ようね。いいわ。脅威は去ったの？」

ブアは硬質光でイヤピースを取り出すと、治安部隊が使用している周波数帯を確認してうなずいた。

「すべてのスキャン結果が、脅威は去ったと告げている。上空にも敵影はない。戦闘ロボットたちは、襲撃下にあるほかの都市から来たのだろう。治安部隊と衛生班が事態の収拾にあたり、輸送ハブも脅威評価が完了するまでは閉鎖されている。ほら、座って」

ブアはサティヤに肩を貸して戦いの跡から離れると、彼女が守っていた建設途中の余暇用スペースの中央で彼女を座らせた。

「オムニックたち。ヌルセクターは彼らにデバイスを埋め込んで……」

ブアの顔が暗く沈む。

「一種の神経抑制装置のようだ。もしかすると、装置の影響は……。とにかく、アーコロジーが誇るトップレベルの研究者たちが分析に当たっている。詳細は、彼らの結果を待つほかない」

そう説明しながらそっと服をめくり、ふくらはぎの深い傷口を確認する。

「少し休むといい、サティヤ。休むべきだ。これはすぐに治る傷じゃない。かなり酷いからね」

「思っていたよりは酷そうね」

と、彼女も同意する。

ブアが片手でサティヤの脚を固定する。もう一方の手は、空中でゆっくりと動いている。その指の動きに目を奪われ、床から細いバイオライトが伸びているのを見落としかけた。どうやら、若木の形らしい。上へ向かって伸びるにつれて枝葉を形成し、幹の中央では幻想的な核が光を放っている。

「きれい」

「ありがとう」

思わず口をついた言葉にブアが答える。

サティヤは、声が出てしまっていることにすら気づいていなかった。

「サティヤ……」

木の生成は続けながら、ブアが問いかける。

「どうして？」

「何のこと？」

「どうして直接ロボットを攻撃せず、バリアの維持に専念したんだい？ 輸送ハブでの戦いぶりを見る限り、直接彼らと戦闘しても、十分渡り合えたはずだ」

「避難している人たちが.....」

「あのドローンたちとオムニックたちの避難場所との間には、少なくとももう2枚の障壁があった。あのドアが壊れても、ドローンたちを倒す時間は十分あったはずだよ」

「そうかもしれない。でも、そうすれば戦いはこの区画にまで及んでいた」

と言いながら、周囲を見渡す。いまだ建設途中ではあるもの、可能性に満ちている場所だ。精密さ、気配り、温かみ。多くの人々が汗を流し、愛情を込めて築き上げてきたことが見て取れる。家と呼べる場所を失った人、そんな場所をそもそも持ち得なかった人のための、新たなホーム。ブアが誇りに思うのも当然だ。

「この場所が象徴しているものは.....。巻き添えで破壊されていようなものではないわ」

「君自身の身を、危険にさらした」

「少しの間だけよ。あなたが来てくれると分かっていたから」

彼は一瞬沈黙し、答える。

「それだけ、信頼してくれているんだね」

「実際、信頼に応えてくれたでしょう？」

「ありがとう。信じてくれて。この場所を守ってくれて」

ブアは目線で周囲を指し示しながら言った。

サティヤの視線は、彼自身ではなく彼の作品の方に注がれていた。バイオライトの木は、もう天井にまで伸びている。優しい光が突然明るくなり、1回瞬くように光ると、体全体が温かな波に包まれるような感覚がやってきた。恐る恐る脚に目をやると、生々しかった傷口が新たな皮膚で覆われていた。

ブアのバイオライトの才能はいつか素晴らしいものになるのではないか、サティヤは昔からそう思っていた。だが、これは.....。純粋な芸術性の観点からも素晴らしいものであることに疑いはないが、実用面での可能性は無限大だ。腕のガントレットですら、ヴィシュカーの装備品とはまったく異なる黒と金とを基調としたデザインで、自然な腕の延長のように見える。表面で波打つ模様は、その1つ1つがライトを貯蔵しておく働きを持つようだ。

自らのテクノロジーを治療用に発展させたことから、ブアの人柄は窺い知れる。もっと別の形で利用しようとする人間の方が多いのではないだろうか。

それなら、ヴィシュカーは？ 彼らなら、ブアのテクノロジーを使ってもっと多くの善行をなせるのは間違いないだろう。

だが、彼らならそれ以上のこともするはずだ。金になる話を、彼らが放っておくはずがない。

「君を出迎えるのが遅れた理由は」

「久しぶりだからね」 彼は首をかしげる。 「手が可愛らしく踊っているかのようで好き だよ。すごく君らしい」

ブアがぼつりぼつりと話し始める。

「ヴィシュカーが君を送り込んできたと知り、自分の心を覆い隠すための時間が必要だったからなんだ」

「ヘリジェットから降りてくるところを見ていたの？」

「ああ」

「私の髪があんな状態だったのも？」

「なんとも愛らしい乱れ髪だったよ、サティヤ」

と、ブアは請け合う。

「まったく、最高ね」

今だって、激しい戦闘を経て同じくらい乱れた髪になっていることだろう。髪以外にも酷い状態だ。こんな姿を人目にさらすのは耐えられないが.....その相手がブアであってくれたことは、せめてもの慰めだった。

「君が訪ねてきてくれたことに、ただただ驚いたよ。いつかはアーコロジーを訪ねてきてほしいと常々願っていたからね。ただ、ヴィシュカー製のヘリジェットに乗って、しかもお堅いヴィシュカーの制服を着て、というのは思い描いていた光景とは違ったけれど」

サティヤは視線を落とし、自分の姿を改めて確認した。ヌルセクターのロボットから飛び散った機械油で、白と紫のヴィシュカーの制服が濡れて肌に張り付き、気持ちが悪い。だが、最悪なのはその生地だ。もともと縫い目がチクチクしていたというのに、今や戦闘で破れた部分のギザギザが加わり、その肌触りは最悪になってしまっている。

「私自身、この制服は好きではないけれど.....。ある種の助けにはなっているわ」

「へえ？」

と、ブアが問い返す頃には、もう木は消えてしまっていた。ゆっくりと慎重に、新たな皮膚に覆われたばかりのふくらはぎの上に彼の手がかざされる。肌の表面に小さな蓮の花が咲き、痛みが襲ってくるかと思ったサティヤは一瞬身構える。しかし、バイオライトは温かく、ブア本人と同じように心地好

かった。

「私服の方が好き。それが正直な思いよ。ヴィシュカーに入る前に住んでいた場所の、近くの仕立屋に依頼したオーダーメイドの服。あれを着ていると、自分の全力を発揮できるの。踊っているときも、何かを作っているときも、戦っているときも。あの姿のサティヤは、ある意味、制服を着ているときの私ではたどり着けない境地よ」

「でも？」

「でも、時々……」

サティヤは慎重に言葉を選ぶ。

「制服の不快感が……チクチクしたり、肌に擦れたり、窮屈で動きにくい感じが、自分の目的を思い出させてくれる。相応しい表情を保つ、助けになるの。仕事をこなすための顔を保つ、助けに」

ひよっとしたら、当を得た表現ではなかったかもしれない。だが、ブアは優しくうなずき、理解を示してくれた。

制服を着た自分は、“サティヤ”ではない。だが、ヴィシュカーでの仕事だって、違う。それは、目的のための手段でしかない。脚本を書き、リハーサルをする。偽りの笑顔を浮かべ、なんとか社交辞令を口にする。ヴィシュカーは常に彼女の不愉快さの限界を押し広げてきた。身体的、精神的、道徳的に。でも、結局のところは……。

「この制服を着れば、上手くやれる」

サティヤは擦り切れた袖口を引っ張りながら続けた。

「疲れるし、とても辛いし、完璧とは程遠いけれど。助けた人々の姿を見れば、成し遂げた功績を目にすれば……。その価値はある、と思える。とりあえずはね」

「意識的に妥協しているんだね」

「ええ」

「それを聞いて安心したよ。他者の快適さのために、自分の不快感を容認しているのかと思ったから。変える必要などないのに、自分を変えようとしているのかと。出る杭は打たれる、という言葉もあるからね」

彼女の口元に笑みが浮かぶ。

「私はそう簡単に打たれたりしないわ」

「そのようだね。うれしいよ、君のことが好きだから。ありのままの君がね」

彼に真実を言ってしまうても構わないだろうか？彼を信頼する気持ちには、戦いの後の気持ちの高ぶりが原因という面もあるだろう。だが論理的に考えて、もはや彼を信頼しない理由はない。論理的でなくては、サティヤではない。

「ヴィシュカーが自分たちの目的を果たすために手段を選ばないことを懸念しているの」と、彼女は認める。

「あなたには嘘をついていたわ。でも……」

ブアが口を挟む前に、サティヤが続ける。

「もし、彼らのもとを去り、彼らを止めようとしたら。私は、何者になる？彼らの行く手を阻む、敵よ。彼らとの戦いで労力を無駄にし、誰かを助けることに割く時間や力は減ってしまう。ヴィシュカーは、私ひとりでは決してできないことを実現させてくれる。決して手を差し伸べられない人々を助けさせてくれる。彼らは莫大なリソースを握っている。内側にいれば、そのリソースをより良い目的に使うよう導くことができる」

ブアは少し考え、うなずいた。

「人々のために、ヴィシュカーが君の導きを受け入れてくれることを願うよ」

サティヤが手を伸ばし、彼の手を少しの間握る。

「あなたとの再会は、とても素晴らしいひと時だった。あなたは大切な友人よ」

「いまだに友人だと思ってくれるんだね。うれしいよ」

少し間をおいて、続ける。

「そうだ、やはり帰りのヘリジェットは手配しないといけないようだね。しばらく輸送ハブは使えないだろうから」

「そうね。でも、ヴィシュカーには急ぐ必要はないと伝えておくわ。それとも、早く去ってほしい？」

ブアの顔に、笑みが広がる。

「アーコロジーは、手を貸してくれる人を大歓迎するよ。特に今はね」

そこからの数時間、2人は忙しく働いた。だが、そばに友と呼べる人がいてくれれば、大したことはない。サティヤは混み合っている診療室で医者たちに手を貸し、ブアは特に重傷の怪我人を治療した。それが済むと、敵のロボットたちが残っていた破壊の爪痕を、2人で回ってできる限り修復した。その際には、コレクティブのセキュリティ担当者が1名同行してくれた。各所の損傷具合を確かめるためでもあったが、アーコロジーのセキュリティプロトコルについてや、ヌルセクターがオムニックに埋め込んでいったデバイスについて、2人の意見や見解を聞くためでもあった。

その作業も終わると2人はレストランへ行き、アーコロジーの農園を一望できる人気の少ない場所を見つけてヴィシュカーのヘリジェットの到着を待った。長かった1日の最後の、つかの間の穏やかな時間。2人は、この貴重なひと時を最大限に活用した。ブアのプロジェクトやスラヴァーサでのサティヤの生活など、離れてからのお互いの暮らしについて報告し合い、共に過ごした子供時代を笑いも交えながら懐かしく振り返った。

サティヤの脳裏に、ある思い出が蘇ってきた。アカデミーの教師がクラスの学生たちをバンガロールの旧ウルソアー湖底での校外学習に連れ出し、厳しい管理が徹底されたアカデミーの監視を離れて硬質光を操る練習をさせてくれた時の記憶だ。サティヤとニランはいつも通りペアを組み、彼女の精密で実用的な構造物を彼が優美で芸術的に昇華させていた。ニランがちょっとした悪戯をすると、サティヤは笑った。しかも、声を上げて。クラスメイトたちの前で。驚いたような、それでいてどこかうれしそうなブアの顔は、我を忘れて笑い声をあげたことを後悔させないほど価値あるものだった。

彼がこちらに身を寄せて囁く。

「湖底での校外学習のことを思い出していたんだね？」

「どうしてそれを？」

「いつも言っているだろう、サティヤ。君の心を読むコツなら、心得ているよ」

最初にここに到着したとき、彼のこの特技を思い出して落ち着かない気持ちになった。だが、今はもうまったく気にならない。

「本当に、昔からいじわるなんだから」

ブアは笑い、ふと気づいて言った。

「君の手……」

「え？」

と、両手をテーブルから上げ、彼女も気づいた。無意識のうちに、同じ動きを繰り返していたのだ。指先で、ほかの指に触れる動き。華麗に指をひねっては、また別の指先に触れることの繰り返しだ。

サティヤはさっと手を下ろし、「ごめんなさい」と謝る。身についた反射的な反応だ。

「え？違う、謝らないで。その癖を懐かしく思っただけだよ、久しぶりだからね」

彼は首をかしげる。

「手が可愛らしく踊っているかのようで好きだよ。すごく君らしい」

サティヤはとっくの昔に、他人がいる前では手をじっとさせておくことを習得していた。仕事中には集中を妨げられるが、今は仕事ではない。友人とおしゃべりをしているだけだ。決意をもって、彼女は再び手をテーブルの上に戻した。指先で、ほかの指に触れる。

他人から見られていることを知ったうえでこれをするのは、かなり久しぶりのことだった。しかも、アーキテック・アカデミーの教師に見咎められた時のように、間違っただけを、恥ずべきことをしていると感ずることはなく、むしろ気分がいいくらいだ。

安心できる。

また別の思い出が浮かび、サティヤは問いかけた。

「私が部屋のドアを固定してしまって、教室から戻ったあなたが立ち往生した時のことは覚えている？」

ブアの目尻が下がる。

「覚えているとも！ずっと読んでいた硬質光の建築技術を君が試したんだ。3学年も上の学習内容だったのに」

「それで……」

「君が何とか開けようとして……」

「ドア枠が！支えを作る段階で、ドア枠を構造物の補強に使ったから……」

「崩れ落ちてきたんだよね！ああ、助け出してくれたスラジュの、あの時の慌てぶりときたら」

2人はこの調子でお互いに言葉を重ねて多くの記憶を再訪した。尖塔に向かって飛行してくるヘリ

ジェットの様子が黒い点となって見えてきた時も、それほど長い時間が経っていたとは感じられず、2人で驚いてしまったほどだ。

数分後、着陸パッドで強風に髪を乱されながら、サティヤはブアに小さく微笑みかけた。

「近いうちに、また会えることを願っているわ」

彼も、いつも通りの明るい満面の笑みで答える。

「また11年後、というのは避けたいね？」

ヘリジェットの開け放たれた搭乗口に、彼女が近づいていく。

「サティヤ」

彼女は立ち止まり、振り返る。

「ヴィシュカーについての疑問にもっと答えを得たいと思うのなら、創設者について調べるといい」

「バット博士？」

と、顔にかかる髪を片手で押さえながら聞き返す。

「どうして？」

「ヴィシュヴァカルマ・バットの遺産こそ、あの時ヴィシュカーのもとに長く留まっていた理由なんだ。そして、彼らのもとを去った理由でもある」

騒音にかき消されないように、ブアが1歩近づく。

「彼が自身のテクノロジーやヴィシュカーについて思い描いていた構想は……。実際にあの会社が辿った道とはかなり異なる」

「調べて何が分かるか、あなたはもう知っているの？」

「正確なところは分からない。だけど、ある程度予想はついている」

「もしそれが予想の通りだったら？」

「アーコロジーには、君という素晴らしい才能が加わるだろうね」

サティヤは笑い声を上げ、ヘリジェットの座席に着いてベルトを締める。感じずに済むことを願っていた、別れを前にしての締め付けられるような痛みが彼女の胸中に広がる。しかし、何の問題もない。今生の別れではないのだから。彼女には、見つけなければならない答えがある。より良い場所へと変えねばならない世界がある……。

そして、いつでも温かく迎えてくれる、友人がいる。